



## 信用という「こと」

### 江戸時代の奈良を事例に

井原西鶴は「世間胸算用」で、目先の利益に負けて信用を失った「蛸売りの八助」を描いた。

これは、江戸期・奈良の「衰退要因」の暗喩ではなかったか。「信用」は地域存続の「要」であり、

未来を見据えた努力なくしては得られない。

近世の奈良を舞台とした西鶴の指摘は、

グローバル時代を生き抜く日本への警鐘でもある。

### カラムシと木綿

大和の国・奈良は、江戸時代に奈良晒の産出地として知られていた。カラムシ（麻の一種。苧麻、苧草ともいう）の織物の流通が盛んになった天明時代以降、京都の白布座、奈良南市の布座、天王寺今宮の布座などの市が立ったのである。原料のカラムシは越後の名産で、まず商人がカラムシを越後から仕入れる。それを京都、奈良、天王寺で織らせる。この段階では、これらの織物は茶褐色で、染めたとしても美しい色が出ない。そこで、奈良で晒して漂白する。奈良は当時、その晒の技術で突出していたようだ。

晒の方法だが、まず湯に灰を加え、織り上げたカラムシの布を煮る。次に木臼に入れて布を搗く。その後、清水で洗う。それを砂場か原の上で晒す。以上を、白くなるま

で何回も繰り返す。丹念な、努力を要する仕事だ。奈良でその技術が突出していた理由は何かわからないが、細心の注意と努力を傾けた働き方ゆえだったのだろう。

井原西鶴『世間胸算用』に「奈良の庭」電」という作品がある。この中に、江戸時代の奈良晒がいかに奈良の経済に大きな役割を果たし、利益をもたらしていたかが、描かれている。

商売のさらし布は、年中京都の呉服屋にかけうりて、代銀は毎年大くりに取あつて、京を大晦日の夜半から、我先に仕舞次第に、たいまつとぼしつれて、南部に入こむさらしの銀、何千貫目といふ限りもなし。すでに奈良へ帰れば、皆みな夜あけになれば、金銀くらにうちこみ置き、正月五日より、たがひにとりやりのさし引する事、例年なり。

得意先は京都の呉服屋であった、と書かれている。しかし実際にはそれだけでなく、染物屋にも売ったようだ。決算は大晦日におこなう。夜半に集め、たいまつをともしながら夜通し金銀を奈良に運び込んだ。その額を「銀、何千貫目といふ限りもなし」「金銀くらにうちこみ置き」と表現する。そして正月5日に、新年の奈良晒の市が立つ。晒し布を売買する問屋が奈良には多くあった。公儀御用の古い問屋だけで24軒もあったといわれる。

しかし疑問がひとつある。江戸時代ではすでにカラムシの衣類が廃れ始めていて、むしろ木綿問屋が急成長していた。広義の麻布は、江戸時代初期までの日本人の日常着の材料であり、大量に生産されていた。しかし15世紀ごろから木綿が国産化され、16世紀には奈良でも生産されていたのだ。奈良興福寺多聞院の僧侶、英後をはじめ三代に渡って書き継がれた『多聞院日記』（1478-1618年）の1571（寛文元年）の記録には、大和の綿作についての記述がある。1591（天正18年）の記録には、大和横田庄が地子年貢として木綿種子をとっていることが書かれている。また別の記録では1595（文禄3）年から1603（慶長7）年の検地帳で、111人中41人が木綿を作付けしていることが分か



1723 西川祐信 「男女雑品定」に見える線くり  
写真：筆者提供

たなか・ゆうこ | 1952（昭和27）年、神奈川県生まれ。法政大学大学院人文科学研究科修士。専門は江戸文化、アジア比較文化。法政大学社会学部教授、オックスフォード大学在学研究員などを歴任。2014（平成26）年から法政大学総長。2005（平成17）年、衆議院要京委員。著書に「江戸の豊穡力」（芸術選奨文部大臣新人賞）「近世アジア漂流」「江戸百景」（芸術選奨文部科学大臣賞、サントリリー文芸賞）「グローバル化セッションの中の江戸」など多数。

田中優子  
Yuko TANAKA